

長特研だより 第104号



発行：長崎県特別支援教育研究大会

事務局：県立川棚特別支援学校

編集校：県立佐世保特別支援学校

発行日：平成29年2月8日

## 平成28年度長崎県特別支援教育研究会 秋季研修会報告

平成28年10月28日（金）、東彼杵総合会館において開催された秋季研修会の講演内容について報告します。

演題：「発達障害のある子供の学校生活を豊かにするために  
～具体的な手立てと関係者との連携～」

講師：特定非営利活動法人 なごみの杜代表理事  
土田 玲子 先生

### ●講師紹介

土田 玲子 先生

日本感覚統合学会会長

NPO法人 なごみの杜代表

日本LD学会特別支援教育士

スーパーバイザー

日本発達障害ネットワーク 理事

県立広島大学保健福祉学部 名誉教授



### ●講演内容

#### 1 世の中には様々な人がいるのが「当たり前」

##### ① 日本の教育観

昔の日本の教育観は全ての子供を平均化しようとするようなもので、例えてみれば、四角いスーツケースのような中にぴったり入れない子供は受け入れない感じだった。反してアメリカの教育は風呂敷みたいで、どんな子供でもしっかり包み込めるものだった。現在の日本の教育はインクルーシブ教育の動きが活発になり、いろいろな子供たちがお互いを尊重し合い、お互いに学び合える社会作りを目指している。「みんな違ってみんないい」、変な意味での特別視をやめて、違うことが当たり前の社会になってほしい。

② いわゆる発達障害とは

**SLD** (限局性学習症：DSM-Vによる区分)

知的な遅れはないが、聞く、話す、読む、書く、計算するなどのうちのいくつかが苦手である。

<例>聴覚的「図」と「地」の判別、「き」「ち」など似た音の識別、音韻や単語数、その順序、位置の識別、言葉の組立て方、聴覚的記憶などの困難、鏡文字

口頭では答えるが読み取り問題では答えられないなど、提示方法によって出来不出来の差が大きい。テストなどでの間違いの仕方からつまずきの実態に気付いてほしい。

**AD/HD** (多動性、不注意、衝動性)

<例> 動きが多くてじっとしてられない、おしゃべりがやめられない、考えるより前に行動してしまう、特定のことに意識を向けそれを続けることが難しい

多動や衝動の強さは気付きやすいが、不注意の特性は見逃されることが多い。多動性がある子供の落ち着かない理由に気付いて(どんなときに?どんな状態で?課題に問題がない?)。

**ASD** (自閉スペクトラム症)

<例> こだわり、興味思考の固さ、コミュニケーションが苦手、頭の回転が早いぼーっとするのが苦手、睡眠障害がある、体を動かしていると調子がいい一方的な会話

社会に出るまでに友達との関係作りの仕方を教えた方がいい。取り巻く環境を工夫する(周りの人の理解が必要)。100点が○なのではなく、頑張ったことを褒めてほしい。

**DCD** (発達性協調運動障害：手足の麻痺はないけれど、動きの協調が必要な動作に障害がある。すなわち、著しい不器用やバランスの悪さなどがあり、日常動作や学業に支障をきたす状態で、スポーツが下手、作業が遅い、書字が下手などで明らかになる)

<例> 運動面、思考面での不器用さ、生き方が不器用

一生懸命努力しているから疲れやすい。感覚調整が苦手なので心身にストレスがかかる。急がせないで、できないことを繰り返しさせないで、努力を認めてほしい。

☆発達障害については、一般的に表面に見える行動の特徴で分類されているが、実際には、いくつかの診断が重なる場合が多い。

※このことを「土田のミックスジュース」と講演で表現されている。

## 2 個性派の子供たちの困り感は決して軽い

- ①本人の困り感が周囲には分かりにくく、見えにくいために「なまけ」や「しつけ」と誤解されやすい。
- ②「適応」しなければならない社会のハードルが高い。

## 3 「困り感」は、本人の「個性」と「環境」、「課題」のミスマッチから生じる



教師は「環境」と「課題」を作っている。3つの歯車がうまくかみ合っていないと、子供たちはうまく成長できない。学校が子供たちを困らせてはいないか、考えてほしい。うまく歯車が回るよう、個性に合った課題、個性に合った環境を作っていくことが大切である。成長に応じて環境や課題の段階を追った道を引いてやってほしい。困っている子供に寄り添う教師が増えてほしい。障害とは、克服するものでなく、うまく付き合っていくものである。

### ① 様々な変革の必要性

- ・子供の見方：障害に注目するのではなく、子供自身に寄り添うことが大切
- ・学校の取組：個々の指導目標と指導計画を立て、柔軟に支援を行う。

コーディネーター等の支援体制の整備

- ・自治体の取組：研修体制、巡回相談体制の整備、予算化、専門機関との連携
- ・国の取組：文科省、厚生労働省、環境省、内閣府

### ② 支援の目標

- ・生き生きと生きる
- ・目的をもって生きる
- ・社会の中で自己実現を図る
- ・社会の中で自己有能感をもつ
- ・自己の存在に意味を感じる
- ・社会の中で役割をもつ



☆オランダでは、95%の子供たちが自分は「しあわせだ」と言っている。日本もそんな社会を作っていきましょう。

#### 4 診断は子供の理解と支援のため

単なるラベリングのためならば、診断はいらない

#### 5 二次障害を起こしている子供は多い

##### ① 二次障害

- ・いじめ、学業不振、不登校、劣等感、不信感、虐待、いわゆる問題行動  
(反社会的行動)

##### ② 二次障害を防ぐために支援の三大法則

- ・大人が変わろう！： 子供の個性の理解、柔軟な発想  
子育て応援システムの構築、子育て環境の整備
- ・子供のいいところを伸ばそう！： 有能感、自信の育成を大切に
- ・子供の苦手な部分は隠し技で育てよう！：  
得意な能力を生かそう、脳に豊かな栄養を  
子供の能力に合った課題の提供、提示

##### ③ 子供たちの支援で特に注意すること

- (1) 早期発見、早期対応
- (2) 二次障害の予防に力を入れる
  - ・力で支配する関係を作らない
  - ・ポジティブな自己イメージを育てる
- (3) キーパーソン支援の重要性
  - ・上手な子育て、療育、教育支援
  - ・キーパーソンの精神衛生支援
  - ・生活に生きる支援



#### 6 学校（世間）の文化について

今までは・・・

- ① 子供の特性に関係なくプログラムと目標が決まっている；集団一斉指導
- ② 目標；「学力」をつけ、「よりいい」学校に入り「よりいい」職業につくこと
- ③ 一過性の関わり

これからは・・・

- ① 子供の特性に応じた指導： I E P 特別支援教育
- ② 自己実現、社会の中で自己有能感をもつ、社会の中で役割をもつ
- ③ ライフサイクルに沿った生涯教育に参画する

## <質疑応答>

Q 保護者にも特性があり、親子関係がぎくしゃくしている。どのような対応をすればいいか。

A 子供だけでなく保護者にも一緒に支援をしていくようにする。「親だからこうあらねばならない」と思っはいけない。例えば、忘れ物が多ければ体操服を家庭と学校に二重に置かせる、宿題を全て学校で行わせて帰す、他の保護者より丁寧に説明するなど配慮をしていく。教師だけで解決しようとせず、外部のネットワーク（児童相談所など）と連携していくことも大切である。

Q 支援学級の中1の女の子が同じ学級の男の子に興味をもち、性的な接触をしたがる。どうすればいいか対処に困っている

A 背景が分からないので何とも言えないが、異性を好きになるということは自然なことだと思う。ただ表出の仕方が問題である。全てを禁止せず、合法的な落としどころを提示してあげたらい。例えば、クラス全員で帰りに握手をするなど、環境の中でOKな線を探してみよう。

